大法輪

特集‖知っておきたい 道元と曹洞宗

【道元と名僧たち】道元・瑩山の生涯と逸話／名僧たちの逸話
【主な教え】道元の教え／『正法眼蔵』入門／名言／修行道場の規則／精進料理から学ぶ【曹洞宗に親しむ】坐禅Q＆A／『修証義』の教え／葬儀／〈出家〉入門／曹洞宗の神さま／名刹 他

〈法話〉道元と曹洞宗の心｜福山諦法／白洲正子論－明恵上人と華厳の世界｜岡本勝人

願い　宮北千織

8

大法輪

平成25年 8

大法輪

平成25年 8

平安時代末～鎌倉時代初期の僧・西行は、伊勢神宮参詣の折、

「何事の　おはしますかは　知らねども
かたじけなさに　涙こぼるる」

清浄な水の流れや川底の小石が光を放ち、千年を数える杉の枝葉は颯々の声を発する、そのような神厳の空気に身を包まれた感激を歌っています。

また、〝和光同塵（仏が神の姿で現れること）〟の心で、

「榊葉に　心をかけて　木綿四手の
おもへば神も　仏なりけり」

とも詠んでいます。

この二つの歌に導かれて、私は、神さまと仏さまの物語を書こうと思います。

――小松庸祐

『〈日本人の心のふるさと〉神と仏の物語』より

目次

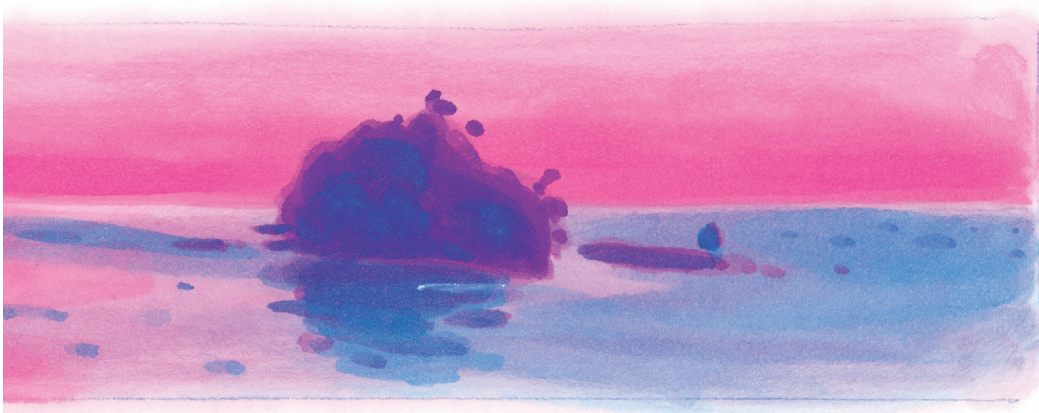
平成25年8月号

表紙「願い」（院展・足立美術館〈島根県安木市〉所蔵）……宮北千織
扉絵……小泉元生
目次絵……吉崎道治
カラー・一色口絵　埼玉県加須市の禅刹・保寧寺……写真・文／佐藤泰司　5
〈巻頭〉人生二度なし……仏画家　武田　仁　21
〈法話〉めげない、にげない、くじけない……片山秀光　22
随筆説法　いのち輝かす仏教（3）……篠原鋭一　28
にっぽん聖地巡拝の旅（20）　金剛寺・観心寺・湊川神社……玉岡かおる　35
近世の仏教再考（3）　羽黒修験……松尾剛次　42
荘子の人生と思想（14）……蜂屋邦夫　48
現代語訳・注『訂補 建撕記』　道元禅師の伝記を読む（15）……吉田道興　54
リレーコラム　仏教の眼　幸……大塚日正　60
エッセイ　私の「縁は異なもの」　びわ湖……太田治子　62
鉄笛〇チャ音便……糸川雅子　〇蝶となった娘……宮下規久朗　64

特集　知っておきたい　道元と曹洞宗

日本仏教の中でも大きな存在である道元禅師と曹洞宗。禅に生きた禅師の生涯にはどんなドラマがあったのでしょう。またその教義の核心とは何なのでしょうか。様々な視点から探ります。

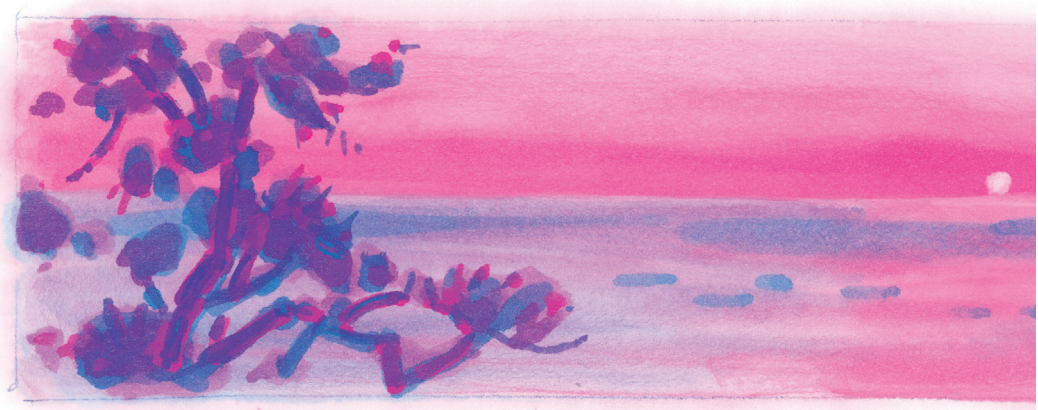
〈法話〉道元と曹洞宗の心―大悲の禅を嗣承して……福山諦法　68
【第一部　道元と名僧たち】
道元の生涯と逸話……74
瑩山の生涯と逸話……79
名僧たちの逸話……84



【第二部　主な教え】
道元禅師の教え……90
修行道場の規則いろいろ……104
『正法眼蔵』入門……94
精進料理から学ぶもの……107
道元の名言……100
〈コラム〉永平寺ガイド……99
【第三部　曹洞宗に親しむ】
坐禅についてのQ&A……110
在家得度・授戒会のすすめ……129
『修証義』の教え……116
曹洞宗の神さま……132
曹洞宗の葬儀……120
行ってみたい名刹……135
曹洞宗〈出家〉入門……125
〈コラム〉永平寺七不思議……138

〈執筆者〉佐藤達全・菅原研州・須田哲成・関口道潤・大童法慧
武田鏡村・竹林史博・豊嶋泰國・中野東禅・能勢隆之

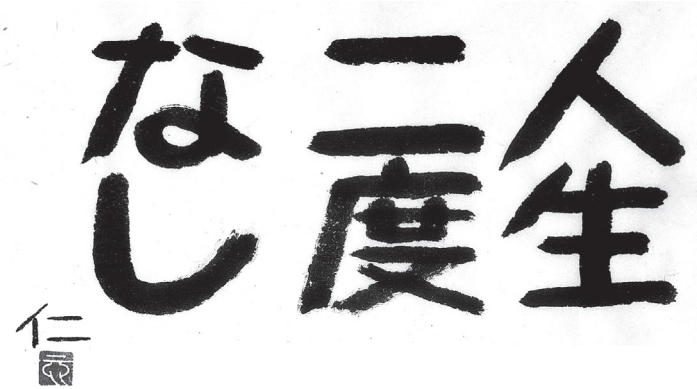
白洲正子論（1）―明恵上人と華厳の世界……岡本勝人　155
旅と骨董、そして自然と神仏を探究した女流作家の心中に流れるある高僧への思いとは何か。
『安心決定鈔』を読む（2）……佐々木隆晃　142
何故いま空海なのか（8）―第二章　謎……岳　真也　148
いま、仏教を学ぶことの意味（24）……菅沼　晃　168
弘法大師御請来の占い（20）斗宿……上住節子　174
日蓮紀行（35）佐渡と鎌倉　滄海はるか……福島泰樹　180
畦昌彦師インタビュー　仏教カウンセリングのすすめ（前篇）…聞き手＝今野本證　162
浄土宗僧侶でカウンセラーの畦（うね）師が説き明かす、「人の悩みの適切な聞き方」とは。



ネット社会とカルト教団（上）……瓜生　崇 195
大学を中心に偽装勧誘などの問題を起こしてきた教団の実態・内部を知る筆者、渾身のレポート。
〈評伝〉「破天荒の画僧」岩崎巴人（8）……横田　喬 186
阿含経典を読む④……横山全雄 192
〈最終回〉ほほえみネットワーク―悲しみの癒し方⑩……田代尚嗣 213
家族が認知症になったら（4）……高山成子 218

大法輪カルチャー講座

《宮沢賢治》入門③―法華経との出会い―盛岡高農の頃…大角　修 202
京の街を歩く⑦北山と常照皇寺……井上満郎 208
山頭火の風景⑯空へ若竹のなやみなし……版画と文・田主　誠 73
仏教なんでも相談室……鈴木永城 200
ドクターらく朝の「井戸端けんこう談義」（12）山葵効いたか目に涙……立川らく朝 224
〈短編小説〉ぬばたまの暗きに居りて……小山榮雅 236
漢詩……奥田魚錢 228
短歌……篠　弘 230
俳句……小川晴子 232
川柳……尾藤三柳 234
囲碁将棋公案……工藤紀夫／武市三郎 66
教界レンズ……226
編集後記……244
カット・さしえ……伊藤礼子／悟東あすか／西谷昌久／橋本樸々



人生二度なし

◎書と絵　武田仁　仏画家

これは森信三先生のお言葉として有名です。私も大好きというよりも、自分の根本信条としていろいろな時に話をしたり、使わせてもらっております。

つまり、「人生二度なし」とは、

一、われわれの人生とは、二度と繰り返し得ないということ。

二、われわれは、いつ何時死なねばならぬかも知れぬということ。

三、それゆえ、与えられた一日一日を充実して生き抜かなければならない。

ということではないでしょうか。

大法輪

平成25年 8

特集

知っておきたい 道元と曹洞宗

この特集の主旨

道元禅師は「仏道をならふといふは自己をならふなり」と言われています。「私とはなにか」「なぜ生きるのか」「なぜ死ぬのか」を明らかにすることを求道し、永平寺を建てました。

そして「只管打坐」と「修証一如」の境涯を極めることをその教義の核心として、曹洞宗は発展していきます。

禅に生きた道元禅師の生涯には、どんなドラマがあったのでしょう？　またその教えのポイントは、どんな内容なのでしょうか？　そして曹洞宗とは、どんな宗派なのでしょう？

今回の特集では、日本仏教のなかでも実に大きな存在である道元禅師と曹洞宗について、スポットをあてたいと考えます。

法話

道元と曹洞宗の心

――大悲の禅を嗣承して――

福山 諦法
大本山永平寺貫首

これは「永平録を読む」と題した、良寛さま（一七五八～一八三一）の詩の一節です。

良寛さまは玉島円通寺の住持国仙和尚の下にあって幾冬春、ひたすら修行に励みました。当寺の日分行持差定に随っての生活でした。その間師の提唱を聴聞し、『永平広録』や『正法眼蔵』等を拝覧する機会があったと思われます。

やがて師の証明を得た大愚良寛和尚さまは円通寺を送行し、行脚の後故郷の越後に帰りました。乙子神社の境内に結んだ草庵にも、五合庵に於ても、常に机上には道

◆道元禅師の法孫として

「春夜蒼茫たり二三更
春雨雪に和して庭竹に灑ぐ
寂寥を慰めんと欲するも良に由無く
背手し模索す永平録　明窓の下机案の辺り
香を焼き灯を点して静かに披き見るに
身心脱落は只貞実のみ　千態万状竜玉を弄ぶ
出格の機虎児を擒にす　老大の風西竺に像る」

元禅師の祖録が置かれて有ったでしょう。

「吾れと永平と何の縁かある、到る処奉行す正法眼……古を慕い今に感じて心曲を労す一夜燈前涙留まらず　湿し尽す永平古仏録」

斯くまで道元禅師を敬い、祖道を行じた良寛さまを私は、古淡の祖師と仰ぎます。道元禅師の法孫につらなる僧侶は、改めて永平開山の教えに参じなければなりません。

◆道元禅師とはどのような方か

道元禅師（一二〇〇～一二五三）、諱は希玄。正治二年生れ、三歳のとき父を失い、八歳時母を失いました。幼少にして両親との死別は悲愁の極みであったでしょう。

母は臨終の枕辺に我が子を呼び寄せて「道元よ、そなたは出家し学道をして私の後世を弔っておくれ」と遺言し儚くなりました。

香火の烟に無常を観じ、いよいよ出家への思いが深まったと伝えられます。

「終に十三歳建暦二年の春、夜中に人知れずひそかに木幡の山庄をしのび出で、叡山の麓下に到り、良顕法眼の室に入る」（『建撕記』明州本）

不退転の決意をもって出家をしたのです。道元禅師の生涯行状についてはさまざまの学説が有りますので、詳解はなお今後の研究の進展を待つところです。此の稿は概要に沿って記すこととします。

有為転変の世相の中で、これから進むべき道を仏法に求めたのは、まさに発菩提心のひとであったからだと言えるでしょう。

比叡山に上り、得度を公円座主に受け修行を重ねました。下りては建仁寺に学び、さらに求道の念止みがたく、明全和尚と共に、航海万里、幻身を波濤に任せて入宋をしました。

南宋の嘉定十六年（一二二三）四月頃、明州慶元府寧波に着き、しばらく船内に留りました。その折、阿育王山の典座との問答が交されました。「あなたは何故坐禅をしたり、先人の禅語を看たりしないのですか。忙しく修行僧の食事をつかさどって何んの好い事があるのですか」と尋ねると、「あなたはまだ弁道ということ、文字

の理ということの意味が分っていないらしい」と大笑し、夕暮れの路を十九キロも先の阿育王山へ戻られたと云います。

又天童寺に在ったときも、用典座に会い、弁道修行の何んたるかを知ることができました。炎天下、仏殿の前で苔（海苔の一種）を晒す老僧は歳六十、汗を流しながら一心不乱に苔を乾す姿に「何故行者やほかの者を使わないのですか」と問えば、用典座云く「他は是れ吾れにあらず」「更に何れの時をか待たん」。

青年僧道元、後の禅師は天童山から出て諸山の善知識を訪ねて師を捜しましたが、中々良師に遇うことができません。しかし天童寺に如浄禅師が晋住したとの報に接し、諸方の行脚をやめて急ぎ、太白山下の天童寺に帰りました。それは運命的にも必然の出会となりました。

長翁如浄禅師（一一六二～一二二八）は曹洞の真風を挙揚して頗る厳峻であり、参禅の衆僧を教導するに、毫も妥協を許しませんでした。道元禅師の述懐に拠れば、如浄禅師が住持であった時は、夜の坐禅は十一時まで坐り、暁には二時半三時頃から修行僧とともに僧堂の裏に坐禅をして一夜も欠かしたことがなかった。居眠りをする僧をば或いは拳で打ち、或いは履物をぬいでそれで打ち、精進をすすめて眠りを覚ました。

「僧堂裏に集まり居て、空しく睡眠するとは何事ぞ……何人か身を安くして世を過している者がおろうか。是れを逃がれて叢林に入り、虚しく時光を過すとは、畢竟何人の用か」

と言われた。しかし其れはゆえあってのことでした。如浄禅師は上堂の因、

「我れ各々の迷を破り、道を助けんがために住持人たり。是れに因ってあるいは呵嘖の言を出し、竹篦打擲の事を行ず。是れ頗る恐れあり。然れども、仏に代って化儀を揚ぐる式なり。諸兄弟、慈悲をもてこれを許し給え」

と申された時、衆僧みな涙を流し、感動したことでした。

如浄禅師を正師と仰ぎ、一途に身心を放下するほどに修行を積み、身心脱落の境地に達したのが、若き日の道元禅師でありました。只管に打坐するその当体が即ち身

心脱落の仏の姿であるというのです。端坐を徹底すれば、脱落身心と成るでしょう。遂に師資証契の仏法が現成したのです。嗣書を授かり、伝法を受けた道元禅師は、一生参学の大事を了畢して天童寺を辞して日本に帰ることになりました。

別れに際して如浄禅師は「只深山幽谷に居し、一箇半箇を接得して吾が宗致を断絶せしむる勿れ」と告げられました。

◆身心一如、修証不二の功徳

道元禅師が帰朝の年時はいく通りかの論考があるのですが、安貞元年八月説によって考えようと思います。弘法救世の念いを抱いて帰国した道元禅師は先ず建仁寺に入りました。そして惜しくも天童山了然寮で示寂（逝去）した明全和尚の遺骨と舎利相伝記が、和尚の遺弟智姉に渡されたことが知られます。

二、三年建仁寺に過した後、山城深草の安養院へと移り、さらに極楽寺境内の一寺、観音導利院に止宿し、仏殿法堂僧堂等を整備して、寺号を興聖宝林禅寺と称しました。本格的な禅道場の開始と言えるでしょう。

宋土より空手還郷の禅師のもとに、僧俗の帰依がありました。その中に道心の固い懐奘、懐鑑、義介、義尹、義演等が入門したことは、今日の曹洞宗の繁栄の基いと思います。但し私たちは、僧数の多少を以って大小の叢林をいう訳にはいきません。侍者懐奘首座を第一に、清規に沿った行持が如法に行われたのです。

此間に於て禅師は多くの著書を残しました。『重雲堂式』『典座教訓』『仏祖正伝菩薩戒法』そして

大法輪　平成25年　8

永平寺（中雀門）

『正法眼蔵』の中多くの巻が、洛外の地深草時代に撰述されたことを心から有難く思います。

この地に十年を過した一門は、寛元元年、北越志比の山に入ることになりました。「山は超古超今より大聖の所居なり」のとおり、永平寺は深山幽谷にあります。当処に身心一如、修証不二の功徳を積まなければなりません。結跏趺坐は釈迦牟尼仏陀、達磨大師、曹渓慧能、洞山良介、天童如浄、永平道元、瑩山紹瑾、各々大和尚に通徹する仏行です。

「いわゆる仏祖の坐禅は、衆生を忘れず、捨てず蜫虫にまでも慈念を給い、済度せんことを願って、その功徳を一切に回向するものです」（『宝慶記』）

◆道元禅師の心は永く世を照らす

私（筆者）は傘松峰下、永平寺に居ります。厳冬の一日、窓外に猪の親子を見かけました。食物を捜してのことでしょうが、二頭の子を連れて、雪山に難渋している様子でした。瓜坊の足は深雪に沈みがちです。転びながらの前進を助けて母は懸命に、鼻を使い、脚を踏んばって雪の急斜面に一条の道をつけ、子を振り返りつつ先導して、山を登り切り、姿を消しました。私は母子の無事を祈り合掌して見送りました。親は無償の慈愛を注ぎます。

大悲の禅は正法眼蔵であり、展開すれば弘法利生となるでしょう。曹洞五十一代の祖師、道元禅師の心は仏陀の心印に適い、永く世を照らし、衆生を救うと信じます。